消えゆく看板を追って

―長岡市与板町の消火活動用せき板と人々の認識についての研究―

172004 伊藤 崇宙

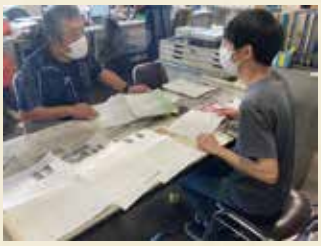
研究の背景

長岡市与板町にて街歩きマップを制作していた際に、街のあちこちでこんな看板状の不思議なモノを発見した。その正体は消火活動時に水路の溝に差し込み水を確保するための「せき板」なのだという。

その特異な姿と、誰にも見向きをされず街から姿を失いつつある現状に心を動かされ、与板のせき板の調査とその記録に加え、街頭での認識調査や小冊子の制作と街歩きワークショップの開催を行い、せき板の保存活用に向けた今後の展開可能性について考察を行うことにした。

与板のせき板についての調査

長岡市消防団与板方面隊
消防団員へのヒアリング

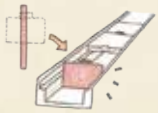


長岡市消防署へのヒアリング

長岡市消防団与板方面隊
元消防団員へのヒアリング

その他に幾度のフィールドワーク・文献調査
消防隊月例訓練の見学・せき板製造元への電話ヒアリングなどを行った。

①せき板の使用手順



せき板を用水路に
差し込んでおく。

山上の堤やため池・
プールの水を落とす。

街の用水路へと水が
流れる。

水がせき止められ水量が確保できる。
ポンプで組み上げ消火活動に使用する。

せき板を差し込む実際の様子

②与板の消火システムとせき板の位置づけ

消火活動では基本的に常に一定の取水が可能な人工水利を優先し使用する。

防火水槽

まず最初に使用される。40 トン以上の水が貯水されており 40 分以上の放水が可能。

消火栓

防火水槽の水では足りないと判断された際に使用される。ホースを繋ぎ防火水槽へ補水する。また、消防団による初期消火にも使用される。

自然水利・その他水利

大火のような左記の設備でも水量が足りない場合に使用される。プールや河川や池の水・農業用水等など。

せき板での水の確保は【自然水利・その他水利】にあたる。
消火活動において最も重要な事は「水を確保すること」だ。
人工水利と自然水利の両方の適切な使用とそのための整備が重要である。

6のせき板

所在：与板町与板 6073（蔵小路）
水源：お蔵池

③せき板の設置経緯

消火活動用せき板に関する資料は存在しないため、正確な情報は不明である。

「与板支所に勤務していた元職員の方からお聞きした話では、消防団から与板支所へ依頼によって与板町が設置したらしい」
（与板消防署の方の証言）

昭和 40 年代頃に与板の西側の堤やため池を自然水利として有効に用いるための水路が整備され、それ以降せき板が設置されていった。
（元消防団員の方の証言）

昭和 50 ～ 60 年代頃に実家の「石丸熊吉商店」（金属加工業を営んでいた商店）に消防団または消防署の人物から「商店近くの水路に設置するためのせき板を造ってくれないか」という依頼があった。
（石丸良吉氏の証言）

これらの証言を踏まえると…

昭和 40 年代に与板の水路が整備された以後、防火水槽や消火栓といった設備がまだ不十分だったことから、消防団の有志が与板支所へせき板の設置を提案。その後必要に応じて地域の金物店によって各せき板が製作・設置されていったのではないかということが推測できる。

④せき板の現状

現在、消火活動におけるせき板の使用はほとんど行われず、放置状態と化している。
その原因の一端は平成 15 年 1 月 1 日の与板町の長岡市合併にある。

長岡市からの指導で堤やため池の水が消防水利として認められなくなった。（代替として与板に防火水槽等の設備が急速に整備されていった）

与板支所が一括して管理を行っていたせき板自体や、各堤・池の水門の鍵といった設備の管轄がバラバラになり、管理放棄や所在不明となっている。

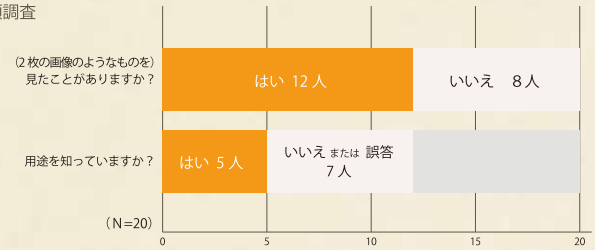
長年の放置により側溝の改修や水門の故障・池の干上がりなど、設備やシステムに不備が生じてきた。

与板のせき板に関連する出来事をまとめた年表

年代	できごと
昭和 30 年（1955）3.31	与板町・黒川村・大津村（槙原・山沢）の合併・開町式が行われた
昭和 39 年（1964）4.1	与板町消防団機関員常備部を中町に設置
昭和 40 年頃	与板の西側の堤やため池を自然水利として有効に用いるための水路が整備される
昭和 42 年（1967）7.15	与板小学校プール（現与板幼稚園プール）完成
昭和 43 年（1968）10.15	舟戸町に火災発生（住宅全焼 7 戸、半焼 2 戸、非住宅全焼 3 戸）
昭和 49 年（1974）6.26	与板小学校旧校舎（馬場丁）火災発生
昭和 50~60 年頃	消防団？署？からの依頼によって石丸熊吉商店でせき板が製作・設置される
昭和 51 年（1976）4.1	与板郷消防事務組合発足
昭和 52 年（1977）11.29	与板郷消防署新庁舎（現庁舎）竣工
昭和 63 年（1988）3 月	与板中学校 プール完成
平成 15 年（2003）	与板乙 971 で火災発生 堤下のため池の水を水路に流しせき板を用い消火活動を行った最後の事例か
平成 16 年（2004）7.13	新潟福島豪雨 その後千体川の護岸工事に伴い、木製せき板を作り替えた
平成 18 年（2006）1.1	与板町の長岡市合併 堤下のため池の水が水利として認められなくなるせき板・水門の鍵など各設備の管轄変更

せき板が製作・使用されていた期間

与板のせき板への認識についての街頭調査
日程：2020 年 10 月 3 日（土）
対象：与板地域の街頭の人々



せき板の使用が消極的になったことで、
人々の中で忘れられた存在になりつつある。

⑤せき板の今後

与板消防署によると、もし今後「せき板が破損した」などの報告があれば撤去していく方針で、労力面や維持管理費面を踏まえると、やはり防火水槽や消火栓といった現代の設備の増設や整備に予算を充てたい、とのことだった。

⑥せき板についての概要まとめ

・与板のせき板は、堤やため池・河川などの地域の自然地形を活かし、消火活動時に水利を確保するための消防設備であった。

・昭和 40 年以降に当時の地元消防団の依頼によって地域の金属加工屋などで次々製作され、まだ与板に消防設備が普及する以前から大火時などに使用されてきたが、与板町の長岡市合併以降、せき板が使用されることは殆ど無くなり放置された状態となった。

・与板での街頭調査では存在を認識している方は一定数いるが、その用途まで知っている方は全体の 25% という結果であった。

・いずれ与板のせき板は街から姿を消してしまうということが予想される。

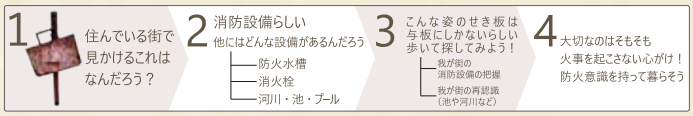
与板のせき板を人々に発信する

このままでは与板のせき板はひっそりと街から姿を失いかねない。小冊子の制作と街歩きワークショップの開催を通して、実証的に与板のせき板の存在や役割・価値を人々に発信する際のアプローチや手法を探ることにした。

「きえるかんばんマップ BOOK」

与板のせき板の見た目を活かし、「きえるかんばん」というネーミングで紹介。与板の街を歩きながらせき板を発見、各消防設備や地域について意識を向けてもらうことを目的とした小冊子を制作した。

2021 年 春より与板の観光案内所や飲食店などで順次配布予定。



「街歩きワークショップ―消看板（きえるかんばん）の謎を解こう」

2020 年 11 月 29 日（日） 10:00-12:00

きえるかんばんマップ BOOK の内容を基に実際に与板の街を歩いて学ぶワークショップを開催。与板に住む子供たちと保護者の方々（7 世帯 19 人）に参加していただいた。補助解説員として消防団員の方をお招きし、参加者にせき板や自然水利について紹介するほか、街の消火システムについて体験的に学んでもらい、地域や消防に意識を向けてもらうことを狙った。

分析と考察

○マップ・街歩きという手法

点在するせき板を探すマップや街歩きは、見慣れた風景を新たな視点で、無意識に暮らす日常を改めて意識的に【眺める・感じる・歩く】といった「我が街の再認識」の側面を持っている。防火教育や地域学習との親和性が高いのではないだろうか。

○与板のせき板の意匠性

与板のせき板の外見は参加者の子供たちにとって印象的なものであったようだ。

○消防関係者（消防団）と一般市民の間の溝

消防関係者と一般市民の間での消火活動への基本知識や認識に大きな溝があった。せき板が「与板の消防」のアイコン的役割を担うことで、与板の人々の防火意識の向上や、消防団という地域コミュニティの活性化に繋げることは可能ではないだろうか。

提案・今後の展開可能性

本研究では主に与板内の人々へ向けた発信について調査したが、今後は与板外部への発信も視野に入れ検討するべきだろう。

○トマソン的存在としての発信

与板のせき板をローカルな不思議として路上観察マニアのような一定の人々向けに発信。与板に訪れる・興味を持ってもらえるきっかけとなるのではないだろうか。

○民俗資料としての保存と活用

現状どの団体にも管理されていない状況にある与板のせき板を、今後も遺していく・保存するための活動として、文化的価値の発信は不可欠である。

与板のせき板は昭和 40 年代に製作された民具の一つであり、地域の歴史や特色・暮らしぶりが反映されていると言える。いわば街の中に残る民俗資料であり、今後の調査結果によっては有形民俗文化財や日本遺産への登録も十分に考えられる。